

植民地朝鮮の「國民文學」¹をいかに読むか

鄭 百 秀

キーワード：植民地朝鮮、國民文學、ポスト・コロニアリズム、二項対立

1 「暗黒期」という命名

韓国の近代文学・文化史では、一九四〇年代前半の植民地末期をあらわす時代区分の概念として、「暗黒期」という用語がいまだ通用している。この「暗黒期」という用語を、最初に、そして最も明確に論じたのは白鐵の『朝鮮新文学思潮史』（首善社：ソウル、一九四八年）である。白鐵は「新文学の暗黒期」の章の中で、朝鮮人作家に日本語が「國語」として強要され²、また戦争協力の表現だけが朝鮮文壇の文学者に許された、植民地末期の暴力的な文化状況を述べながら、「一九四一年末から一九四五年までの約五年間は、韓国新文学史上における羞恥に満ちた暗黒期であり、文学史的には白紙とみなされるべきブランクの時代である」（『新文学思潮史』（改訂版）新丘文化社：ソウル、一九八〇年、五七三頁）と規定したのである。

それ以来、張徳順の「日帝暗黒期の文学史——一九四〇年から四五年までの非様式の国文学」（『世代』、一九六三年九月）、林鍾国の『親日文学論』（平和出版社：ソウル、一九六六年）、張徳順の『韓国文学史』（同和文化社：ソウル、一九七五年）、宋敏鎬の『日帝末暗黒期文学研究』（セムン社：ソウル、一九八九年）などの文学史的研究を経て、今日の植民地期の文学・文化についての一般研究に至るまで、この「暗黒期」という用語は受け継がれている。

もちろん、最近の研究では「暗黒期」という用語が韓国近代文学・文化史の時代概念として適切ではないとの指摘も出されている。たとえば金在湧は『協力と抵抗—日帝末の社会と文学』（召命出版：ソウル、二〇〇四年）の序文で「日帝末の文学はそれ以前の近代文学の決算であり、また分断以後に展開される文学の出発に位置する結節点であって、決して「暗黒期」ではない」（五頁）とし、植民地末期の文学に対する研究の重要性を強調している。実際に、植民地末期が「それ以前の」決算であり「また分断以後」の出発であるほど、韓国近代文学史において意味に充満している時期であったか。こうした金在湧の主張に同意することはもちろんできないが、とはいえ、その議論に関与するつもりはない。

ここで確かめておきたいのは、金在湧の批判的議論に明らかであるように、「暗黒期」が最近の植民地文学研究でももっぱら文学史の空白を意味する用語として理解されているということである。そして、植民地末期が文学史の空白に該当するか否かに関するこれまでの研究が、「暗黒期」という概念自体を問題視しようとはしなかったということである。

本論考の観点からすると、「暗黒期」とは、もともと＜何らかの状態を表現する＞用語ではない。それは、主観的、情緒的な反応を比喩的にあらわす概念であり、しかも、より大切な点であろうが、相対的な関係に基づく概念なのである。したがって、ここで問わなければならないのは、誰によってどのような立場で、一九四〇年前半の植民地末期——あるいはアジア太平洋戦争期——が「暗黒期」と命名され、流布するようになったのかということである。

まず、用語成立の面から推察できるのは、解放以前と以後を「闇」と「光」（暗黒と光明）に対立させ、後者の地点から前者のほうが「暗黒期」と名付けられているということである。「闇」と「光」の対照なしに、そして後者の位置に立たない限り、認識主体が「暗黒」を知覚することは不可能だからである。一九四五年八月一五日が韓国文化史において「光復節」として記憶されていることからわかるように、この「闇」と「光」の対照の一般化こそ、植民地被支配の過去を清算し、新たな民族共同体の未来を構築していくための最も効果的かつ便利な認識装置であったのである。「闇」と「光」の対照を集団情緒に溶け込ませるメディアとして文学が動員されたのはいうまでもない。解放直後の一九四五年一月二日に中央文化協会が発刊した『解放記念詩集』（平和堂印刷部：ソウル）は、その典型的な例の一つである。

二編の詩の一部を逐語訳する。

圧迫と蹂躪と犠牲に埋もれた三六年 / 血を流し、呻吟し / 自由を求め、解放を願
い / 我々はどれほど / 動く世紀の波動の中に / 跳び込もうとしたのか（金光燮「束
縛と解放」）

隠れてしていた息を / 大きく吸い / 胸が、胸がますます大きくなる……野に咲く
名もなき花から / 小鳥まで / 皆踊れ、歌え / あ、喜びの心はこの胸からあの胸に /
鐘の音のように響き渡るとき / この地に初めて足を踏む連合軍よ / 正義は、あ、正
義はまだわれらの同志なのだ（呉章煥「連合軍入城歓迎の歌」）

これらのプロパガンダ詩の直接的な意図は、光復、解放、正義の到来などから得た感動を大衆に伝えることである。そのため、「圧迫と蹂躪と犠牲に埋もれた」過去と「喜びの心」が「鐘の音のように響き渡る」現在を対照させることによって、現在の 価値が克明に強調されるように語るのである。いいかえれば、「闇」と「光」の対照を、「われわれ」の情緒に刻み込むということである。この「闇」と「光」の対照の集団情緒化が、実は、非現実的な幻想のなかで行われていることをまず指摘しておきたい。周知のように、日本帝国

主義による植民地朝鮮の支配の終焉、すなわち朝鮮半島の解放は、現実的には、朝鮮民族の自らの闘争で勝ち取ったものではない。そうではなく、米・ソという超強大な戦勝国の利害に基づいて行われた東北アジア地域の再編成の中で、副産物のように＜他者より与えられた＞ものである。しかし、解放直後の韓国文学言説は、「八月一五日」の「光復」を、朝鮮民族があたかもそれを＜予見し、願い求めていた＞かのように、歴史的帰結として＜来るべきものがきた＞かのように、そして＜朝鮮民族がその世紀の闘争に同参した＞かのように、表象しているのである。

「闇」と「光」の対照と認識主体を後者に位置させることが、このように、非現実的な幻想の中でしか行われぬ操作ではあるものの、それこそ「解放」に対する歴史文化認識のもっとも顕著なイデオロギー的特徴であった。それはさまざまな文化現象として現われる。たとえば、解放直後の韓国文学言説には、過去に対する後悔や未来に対する不安などの、個人の内面を扱う作品が稀少である。それはどのような文脈で理解されるのだろうか。周知の通り、解放直後の作家たちは、いきなり与えられた現実状況の変化の中で、過去に対する何らかの自意識を、理性的であれ、情緒的であれ、必ず体験したはずの人々であった。なぜならば、「八月一五日」以後朝鮮語による朝鮮民族文学のほうに回帰した作家の大多数は、過去の植民地期を日本語作家、植民地エリート、あるいは土着ブルジョアとして生きていた人々であり、したがって彼らにとっての植民地末期は「隠れて」「息を」しなければならなかった「圧迫と蹂躪と犠牲に埋もれた」時代ではなかったからである。その過去を隠蔽するためには、過去を「闇」にほうむるか、現在を「光」に充満させるか——もちろん両者は同じ操作なのだが——をしなければならなかったのである。解放直後の韓国文学が、個人的内面を問う代わりに、集団的歓喜や熱情の表現に一貫した理由がそこにあったのではないか。つまり、「闇」と「光」の対照を基本戦略とする解放以後の韓国文学の集団言説は、まず、「八月一五日」の現実状況の変化に応じて生の方角を転換せざるをえなかった地点で生じた、文学者たちの実存的、内面的、あるいは精神病理的コンプレックスを忘却、隠蔽させたのである。

「暗黒期」という時代概念を韓国近代文学史の記述の中に最初に取り入れた白鐵の場合も、周知のように、日中戦争期に、具体的には一九三八年一〇月武漢陥落以後に発表された「時代的偶然の受理」（『朝鮮日報』一九三八年一二月二～七日）によって、プロレタリア文学運動から「親日協力」のほうに転向した文学者である。白鐵個人の立場からしても、「暗黒期」という命名には、過去の「親日」によって発生したはずの一種の不安意識を抹消、隠蔽しようとする欲望が含まれていたのである。実際、解放直後の韓国文学の全体的な流れは、「八月一五日」まで植民地被支配の状況の中で日本語文学に携わっていた朝鮮人作家が、解放以後、植民地文化統治によって排除、抑圧されていた韓国語の文学にいきなり回帰することによって展開されるというかたちに捉えることができる。こうしてみると、白鐵の「暗黒期」という命名が韓国文学・文化史の時代区分として一般化されるようになった理由がある程度明らかになる。すなわち、「暗黒期」という概念は、解放以後日

本語から韓国語の文学に転換した文学者たちが抱いていた、「八月一五日」以前の過去を隠蔽・忘却しようとする集団的欲望を都合よく代弁していたということである。

2 <二項対立の認識>の継承

一九四〇年代の朝鮮人作家の日本語文学に対する今までの研究は、まさにこの「暗黒期」命名における<二項対立の認識>によって支えられている。「暗黒期」が過去と現在、親日と反日を断絶させるとともに、その前者のほうの排除を追求するイデオロギー的戦略によって命名されたとするならば、たとえば金在湧の『協力と抵抗』などでの、「暗黒期」を否認している最近の議論——先ほども述べたように、もともと金在湧は「暗黒期」を、その時期が韓国文学史の空白ではないという点で、否認しているだけで、「暗黒期」命名のイデオロギーそのものを批判するわけではない——も、協力（「闇」）と非協力（「光」）の文学を対照させ、後者の立場で「暗黒」の文学を暴露するという点において、「暗黒期」に対する批判というよりは、むしろそれへの積極的な容認であらざるをえないのである。

解放直後から二〇〇〇年前後までの、植民地朝鮮の「國民文學」に対する研究の全体的な展開や、それに貫徹する、朝鮮語か日本語か、抵抗か協力か、あるいは親日か非親日かという<二項対立の認識>に関しては、新たな民族文学の樹立を目標とした解放以後のイデオロギーを批判する以前の議論（拙著『コロニアリズムの超克』（草風館、二〇〇七年）の「韓国近代文学における母語中心主義」）で述べた通りである。ここでは、多少の補足とその後の研究動向について付け加えてみたい。

ほぼ半世紀以上の期間にわたる従来の研究において、その<二項対立の認識>がどのように受け継がれているのだろうか。一九四〇年代の日本語文学を<反民族的>、<親日的>という価値を与え、韓国の近代文学などの精神文化史から排除しようとした解放直後の研究が、集団的、情緒的なイデオロギーによって行われたとするならば、日本語文学テキストから非「協力」、非「屈従」的な価値を見出そうとした、その後の研究、具体的には金允植、安宇植、川村湊らの研究も、基本的には同一の二項対立的な認識の構図を共有している。たとえば安宇植の次のような解説は、テキスト解釈に<二項対立の認識>が図式的な先入観としてどれほど深く関与しているのかを物語る。

これらの作品評（兪鎮午の金史良『ムルオリ島』に対する評、「國民文學といふもの」『國民文學』一九四二年十一月、一〇頁——引用者）をとおしても、より強烈に感じられるのは、朝鮮が、たとえ政治的には日本の植民地統治下にあるとしても、金史良にとって、いや彼のみならず朝鮮人すべてにとってかけがえのない存在であり、他のだれのものでもなかったという、そのことである。この点は「ムルオリ島」に限らず、「太白山脈」についてもいえることである。これらにはいずれも一貫して、形式的には朝鮮民族の手から朝鮮を取りあげることにはできても、朝鮮民族の心のな

かの朝鮮までも奪い去ることはゆるすまいとする、理屈を超えた心情があり、それによって民族主義者金史良の主体的な位相がつよくささえられていることを知るのである。したがって、雑誌『國民文學』に発表された限りにおいては、金史良の作品にみられる民族的、芸術的抵抗の姿勢は依然として保たれており、いささかもゆるぎないものであった。(安宇植『金史良』草風館、一九八三年、一五六頁)

『ムルオリ島』(『國民文學』一九四二年一月)は発表当時から高く評価された作品である。たとえば兪鎮午の評以外にも、「スケールが大きく、イマジネーションがいかに発揮されており、恐らく今年度第一のロマンではないかと思う」(則武三雄「側面的文藝時評」『朝光』一九四二年二月)などの評もある。こうした作品が、まず解放直後の韓国文学史的言説では、『國民文學』という御用文芸誌に、「國語」で発表されたという理由だけで、「反民族的文学」という標識が貼られ、排除されるようになった。これに対して、安宇植の『金史良』では、兪鎮午の『ムルオリ島』評、特に「呼吸の大きい、美しいロマンティズムの作品で西鮮地方の人々に特有な、線の太い、激情的な性格が鮮やかに生きてゐて嬉しかった」という印象批評を根拠に、「民族主義者金史良の主体的な位相がつよくささえられていることを知る」と断定されている³。

「呼吸の大きい」、「美しいロマンティズムの」、「線の太い」、「激情的な性格が鮮やかな」、などの主観的な修飾表現を通して把握できる、客観的な情報とは、この作品が西朝鮮の自然を背景にし、そこでの人々の生活を描いたという程度のものである。兪鎮午の評だけを言及しながら、『ムルオリ島』を直ちに「民族的、芸術的抵抗」の作品として位置づけてしまうことから、安宇植の議論が、性急なく二項対立の認識のイデオロギーに完全に囚われていることは明らかである。ここでいう「理屈を超えた心情」というのは、金史良の『ムルオリ島』の内容というよりは、研究者の非論理的、イデオロギー的先入観を語る表現ではないだろうか。『ムルオリ島』の意味をこうした研究者の図式的先入観から解放するために、いいかえれば、植民地朝鮮の「國民文學」研究における二項対立の認識をのりこえるために、テキストの再解釈がつよく要請されるということである。

一九四〇年代の朝鮮人作家の日本語文学テキストにおける、非「協力」、非「屈従」的な価値を見出そうとする企画は、実は、「協力」的、「屈従」的な「親日文学」に対する議論と同時進行する。一方の価値を<真正なもの>に定立させるためには、原理的にみて、他方の<不正の>価値を相対的に、対一形象的に確定する方法しかないからである。ここでは、李光洙の『加川校長』(『國民文學』一九四三年三月)がどのように代表的「親日文学」として評価されてきたのかを取りあげてみよう。

『加川校長』を最初に批評したのは林鐘国の『親日文学論』である。「民衆に皇国精神と文化を注入」しようとする主題意識の表現が不明確である、いいかえれば、作家自身の親日イデオロギーを一貫して形象化することができなかったとの指摘である(同書、二九八頁参照)。一方、金允植は、「これら(一九四〇年代に発表された李光洙の未完成の日本語

長編小説——引用者）に比べ、短編「加川校長」は、春園（李光洙の雅号——引用者）ならでは、そして親日文学の典型的作品」（『李光洙とその時代3』ハンギル社：ソウル、一九八六年、一〇一三頁）と評価している。宋敏鎬の『日帝末暗黒期文学研究』もまた、「日文で書いた「加川校長」は」作家が「香山光郎という日本名で発表しただけでなく」、「模範的な戦時生活を形象化した」（七七頁）代表的な親日作品という大同小異の評価をしている。

一九四〇年代の李光洙文学を詳細に考察した李京埴の研究（『李光洙の親日文学研究』太学社：ソウル、一九九八年）では、『加川校長』を親日文学と規定する根拠を次のように述べている。

（前略）「加川校長」は典型的な親日文学という規定にそのうえなくよく合う作品である。ここで春園は第一、自身の「修行」及び奉公論の化身である日本人校長加川という似非主体を確立し、第二、彼を通して、真の主人公であるべき朝鮮人を否定的で醜い皇民教育の対象とし、「彼らの愛」（李光洙の同時期の小説——引用者）に登場したような主体的、能動的な朝鮮人学生の姿を完全に剥奪し、第三、朝鮮人と日本人の被害者、加害者の関係を逆転させているのである。（三一三頁）

今までの『加川校長』研究は、その視線を作家の親日イデオロギーが作品でどのように表れているのかという一点に集中している。それによって、親日文学の失敗作、あるいは典型的な親日文学という規定が最終的な結論として出されている。このように、今までの研究では、親日かそうではないかという二項対立の捉え方が作品評釈の唯一の基準になっていたのである。

この四人の研究者の解釈を支えているのは、被害者の朝鮮人、加害者の日本人という図式と、朝鮮人作家は「真の主人公」として朝鮮人を設定するべきだという認識である。作家の分身として日本人校長の加川を描いてみることで自体「似非主体の確立」と批判されている。この点において、この四人の解釈は、親日・反日の二項対立に完全に拘束されているといわざるをえない。こうした認識は、一定の論理展開を装ってはいるが、実は同語を反復する還元主義的な先入観にすぎない。それは次のような簡単な反論によっても明らかである。

「親日」というのは、朝鮮人が日本語・日本文化・日本精神のほうに同化を求め、またその同化政策に協力することを意味するはずである。もし加川校長が、今までの研究が決めつけているように、日本人であるならば、その人物が「親日」的であることは自民族中心主義の立場からすると当然ではないだろうか。また、朝鮮人作家が主人公を日本人に設定したことを「似非主体の確立」すなわち作家の親日行為と看做しているのははたして妥当だろうか。植民地末期の文化状況の中で朝鮮人作家が日本人校長を演じてみることで自体、李光洙の「國民文學」における実験精神の表れの一例として理解することはできないのだ

ろうか。その精神とは、いいかえれば、誰より高い道徳的基準を持ち、それを実践しながら日本人教師までも感化させる主人公が朝鮮人作家の自伝的人物であるということが、日本語読者にはどのように受け止められるのかに対する作家の関心に他ならない。もし加川校長が朝鮮人であり、否定的な人物らが日本人であったとするならば、同じ内容と構造の作品が今度は植民地民族主義を標榜する「反日」文学として規定されることになるのだろうか。

「親日」と決めつけられていた作品からテキストの両価的意味を読み取ることは、李光洙文学の再解釈にも重要な根拠一つになりうると思われる。たとえば「行者」という文章で李光洙は「内鮮一體」を次のように訴えている。「行者」は、当時『文學界』の実質的な責任者の小林秀雄宛てに書かれた手紙形式のエッセーである。

内地の七千何百萬の同胞が、「内鮮一體同胞相愛萬歳々々萬々無窮歳」と一年間も念願して下されば、八百萬の神々が總出動をなさるのではないでせうか。そしたら一億の同胞が、それこそ一心一體になるのではないでせうか。（『文學界』、一九四一年三月、八六頁）

こうした李光洙の発言について、今までの研究では、金石範が要約的に評価しているように「奴隸のこぼ」(『転向と親日派』岩波書店、一九九三年、四九頁)の側面だけが指摘されてきた。しかし、「行者」というテキストの解釈でより重視しなければならないのは、朝鮮人知識人から植民地住民の日本国民への統合を主導する立場にあった植民本国の日本人知識人に送られたメッセージという側面である。すなわち「行者」が、アジア太平洋戦争期の内地文壇の代表的な知識人であった小林秀雄に、朝鮮人知識人の「本当の日本人」への修行を、単に報告する文章ではないことは明らかである。日本人全体が「内鮮一體」への修行とともに参加することをも、このテキストは、強く要求しているからである。いいかえると、「行者」は、「内地の七千何百萬の同胞」の「念願」なしには、真の「内鮮一體」には到達出来ないということを逆説的に主張する文章なのである⁴。もし「行者」の言葉が、単にものを語るあるいは指示するといった領域を超え、発話者と受話者との間の実践を巡る闘争のメディアでもあるならば、そしてその観点からテキストを解釈とするならば、李光洙の「奴隸のこぼ」に秘められている先鋭な闘争の意志を読み取ることができる。

そして、李京垣の『李光洙の親日文学研究』には、今日の植民地朝鮮の「國民文學」研究において固定化されるようになった議論構成の命題の一つが示されていることを見逃してはならない。すなわち、「親日文学の内的論理」に関する十分な検討、解釈を通して(一五頁)、「われわれの近代文学史及び精神史の傷痕を克服しようと試み」(一二頁)たという、自らの研究に意義を与える記述がそれである。もちろんここでの「精神史の傷痕」云々とは、張徳順、林鍾国の『親日文学論』以来にパターン化され、今までの一九四〇年代文学に関する研究が反復してきた結論と同一のものであって、なおさらの注目には値しない。しか

しここで、『李光洙の親日文学研究』で十分に検討、究明しようとした「親日文学の内的論理」とはいったい何か——親日・反日とは、基本的に、論理ではなく、情緒である——について問わないわけにはいかない。なぜなら、金在湧の『協力と抵抗』などの研究が「親日文学研究の新しい地平を開いた」のは「親日文学の内的論理」に新たに注目したためであるという評価まで出されている⁵のが今日の韓国文学研究の状況だからである。

今日「新しい親日文学研究」が掲げている「内的論理」とは、簡単にいうと、植民地末期の日本帝国主義の文化統治の「外的」強制に対立する用語として使われているようである。つまり、以前の研究が「親日文学」の動因として「外的」強制を強調したのに対し、「新しい親日文学研究」では「親日作家の自発的論理」を探究するという主張に至ったのである。しかし、「外的強制」と「内的論理」が、作家個人のイデオロギー形成において、これほど明確に「外」と「内」に二分化される領域なのだろうか。かつてアルチュセールは、「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」（一九七〇年）で、主体のイデオロギー形成の過程が＜呼びかけと答え＞の同時作用によって行われるということを明らかにした。すなわち、「外的強制」と「内的論理」は分離不可能な相補関係にあるのである。作家の「親日協力」イデオロギーの形成をもし「外的」状況と「内的論理」に分離させることによって説明するとするならば、植民地被支配の状況で「親日」的日本語文学に携わっていたほぼ全員の朝鮮人作家が、解放以後は、韓国語による民族文学・文化建設に身を投ずる⁶ようになる現象、そしてこうした「自発的？」イデオロギー的転向はどのように理解すればよいのだろうか。

つまり、今日の親日文学研究の新たな地平とまでいわれている「内的論理」への追求とは、「外的」強制より本質的な「内的論理」の「親日」を定立させようとするという点において、従来の研究の継承だけでなく、＜二項対立の認識＞をより強化する企画なのである。

3 ポスト・コロニアリズム議論の限界

作家の「親日」イデオロギーにあまり拘泥しない、その点において＜二項対立的な認識構図＞からは多少自由であるように見える研究が、ポスト・コロニアリズム論議を中心に今日の新しい研究の流れを形成している。親日文学に内在する多層的意味を読み取ろうとする、これらの研究の立場は、崔ギョンヒの次のような批判的認識によって代弁される。

この論文（「親日文学の別の層位——ジェンダーと＜野菊抄＞」『解放前後の再認識』冊世上：ソウル、二〇〇六年——引用者）は、親日協力に対する大部分の既存の研究が作家の政治イデオロギー選択という主題に没入しすぎたあまり、その底辺にある「文化的」要素らの複合性から目をそらし、これについての真面な研究が行われてこなかったという批判的な観察から出発する。今まで「親日」または「協力主義者」というレッテルが貼られた文学者の著作と活動は、強力な道徳的民族主義

の観点、あるいはそれに関連した観点から注目されるだけであって、他の視覚から考慮される対象にはなれなかった。親日文学と呼ばれる作品らをテキストとして解釈し、真面な学問的方法の対象に取り上げた最近の批評（崔ギョンヒは、金哲「親日文学論——近代的主体性形成と関連して」『民族文学史研究』8、一九九五年、李京垣の『李光洙の親日文学研究』などを取りあげている——引用者）の試みが新鮮に見られる所以もここにある。しかし、最近のこれらの研究もまた、親日テキストの底辺の生産条件、生産要素、そして生産主体などの問題に対してより包括的な文化面において細心の分析を加えるレベルに達する必要がある。（三九一～二頁）

今までの研究が価値判断の基準を政治的イデオロギーの表現だけに求めることによってテキストの解釈的想像力を大きく制限しているという批判と、親日文学テキストを構成する多様な意味の層に対する繊細な考慮が必要であるという主張が、今日の一九四〇年代の日本語文学に対する研究の立場として代弁されているのである。もちろんこの議論における批判と主張の妥当性は認めなければならない。しかし、テキストに内包された「多様なニュアンスと不確定的な意味」を読み取ろうとする意図が、はたしてどの水準で実践されているのだろうか。崔ギョンヒの論文も含めて、この立場の研究の重要な成果の一つである尹大石『植民地國民文學論』（亦楽：ソウル、二〇〇六年）などからは、次のような限界と問題点を指摘することができる。

これらの研究において何より目立つ傾向とは、テキスト解釈そのものが、カルチュラル・スタディーズ、あるいはポスト・コロニアリズムという西洋語出自の学说的言説が提示するキーワードを巡って行われているという点である。たとえば、コロニアル・サブジェクト、フェミニン・サブジェクト、サバルタン、クレオール、ダイグロシーなどのポスト・コロニアルの問題系と、模倣、横領、差異、反復、擬態、脱臼などの理論的トポスがそのまま議論の中心テーマとして取り扱われている。それによって、植民地朝鮮の「國民文學」と、英語圏、フランス語圏の旧植民地域と宗主国のポスト・コロニアリズム文学に共通している幅広い要素についての議論が本格化されるようになった。その点はもちろん肯定的に評価しなければならない。しかし、テキストの意味をポスト・コロニアリズムのキーワード、ないし概念に当て嵌める、あるいはそれに当て嵌まる部分だけを取りあげる傾向があること、したがって、議論そのものが、作品全体に対する総合的、有機体的な理解を示すというよりは、項目別の、羅列式的説明記述になっていることなどについては、明確に批判しなければならない。しかも、ポスト・コロニアリズムの重要概念が日本語や韓国語に直訳されると、本来の西洋語の議論における意味と文脈がゆがめられる場合が少なくない。それらの概念に依存する研究言説は、同じテキストに対するほぼ同じ内容の議論が既存の研究ですでに出されたにもかかわらず、西洋語出自の翻訳概念がそこに用いられなかったことを指摘し、自らの議論の新しい地平を確認しようとさえする。まさにこうした傾向こそ、今日のポスト・コロニアリズム議論が口をそろえて批判する「自己の他者化」あるいは「自

己植民地化」ではないだろうか。

＜地球規模の植民地文学＞という一般性を追求するこれらの研究がまず見逃しているのは、一九四〇年代の植民地朝鮮の日本語文学テキスト群の特殊な性格である。最も重要な特殊性とは、テキストの＜断種＞にあると思われる。すなわち、植民地朝鮮の「國民文學」というテキストは、旧植民地域と宗主国で展開される他の植民地文学とは異なって、二世紀初頭の現在の歴史的展望からすると、類似な言語的、イデオロギー的状况の中では再度に生産、消費されえないものである。それだけでなく、現在の日本語と朝鮮語の一般読者にとってはほぼ忘れられた作品群なのである。すべてのテキストの生産と消費が、もちろん同一のものとしては反復しないであろうが、一九四〇年代の朝鮮人作家による日本語文学ほど、その断種性格が特に著しいテキストは他にないといっても過言ではない。したがって、植民地朝鮮人作家の日本語文学テキストを解釈する立場には、過去と現在の関係そのものを問題化する——本論考の文脈でいうと、過去と現在の断絶を前提する＜二項対立の認識＞にどのように抗していくかという——歴史認識の定立が必ず要求されるのである。

崔ギョンヒは自分の論文の目的が「＜野菊抄＞（崔貞熙の作品、『國民文學』一九四二年十一月——引用者）を親日文学という烙印の押し付けから解放させることではな」（四三二頁）いと断言している。すなわち「親日」の実体化を暗黙的に前提しているのである。ここでも明らかなように、ポスト・コロニアリズム議論の立場から親日・反日の＜二項対立の認識＞に対する積極的な批判を読み取ることはできない。一九四〇年代の朝鮮人作家の日本語文学テキストの解釈的想像力を制限している根本的な原因が、「強力な道徳的民族主義の観点」にあると認識したならば、その観点の＜二項対立の認識＞をより徹底的に批判する作業を先行させなければならない。親日・反日の二項対立を温存させたまま、テキストの「多層的な読み」を求めている点に、これらの研究の認識の性急さが確認される。そして、テキスト解釈の基準を、一方的にポスト・コロニアリズムの学的言説から求めている点に、その議論の生硬さを確認することができる。ポスト・コロニアリズムの議論は、基本的に、既存の批評理論の非＜政治＞的性向に対する強力な抵抗言説として展開されたはずである。それに全幅の信頼を置いている今日の研究が、「作家の政治イデオロギー選択という主題に没入しすぎた」今までの研究の立場を心情的に批判しながらも、植民地朝鮮の「國民文學」研究の＜二項対立の認識＞からテキストの解放を理論的に実践することができなかったのは当然の帰結であったとみられる。

4 ＜二項対立の認識＞に抗して

それでは、植民地朝鮮の「國民文學」をいまいかに読むか。いいかえれば、それらの作品群を取り上げる研究の現代的意義とはいったい何だろうか。もちろんその研究の根本的意義は、今までの研究言説が主張するように、テキストに内在する非「協力」、非「屈従」

的要素や多層的意味を読み取るということから確認されるわけではない。植民地朝鮮の「國民文學」の研究対象としての一義的な価値は、逆説的にも、過去と現在、親日と反日、そして協力と抵抗を分節し、後者の立場から前者を批判する＜二項対立の認識＞によって解釈・裁断されてきたもっとも顕著なテキストであったという点に見出さなければならない。つまり、戦後韓国文学研究の自民族中心主義の根幹をなすこの＜二項対立の認識＞に抗していくためには避けて通れないのがそれらのテキストの再解釈なのだからである。

まず、＜二項対立の認識＞の前提にあたる、過去（植民地期）と現在（解放以後）の断絶企画をどのように解体するか。この課題を解決するためには、過去と現在の共謀的な関連の様相を綿密に検討していかなければならない。一九四〇年代の朝鮮人作家の「日本語文学」研究の嚆矢ともいえる林鍾国の『親日文学論』での、「今後、韓国の国民精神に立脚し、韓国の国民生活を宣揚する、韓国の国民文学を樹立しようとする人々のために、彼／彼女らの植民地的「國民文學」はよき参考資料となるだろう」（平和出版社：ソウル、一九六六年、四六九～七〇頁）という研究の動機からも明らかなように、過去の「國民文學」における「外部」統合のイデオロギーが現在の国民文学の「内部」構築のイデオロギーによって批判されるのである。このように、植民地朝鮮の「國民文學」テキストの場合、それが自民族中心主義のイデオロギーによって横領され、裁断されてきたがゆえに、テキストが具体的にどのように読まれたのか、また、どのように読むかについての考慮が必須になるのである。＜二項対立の認識＞のイデオロギー的目的とは、一言でいうと、過去の隠蔽（あるいは暴露、断罪）と現在の構築にある。解放以後の韓国文学・文化論の「隠蔽と構築」の意志とその実践に対する批判的考察は拙著『コロニアリズムの超克』（草風館、二〇〇七年）の序「脱植民地の主体への追求」で試みたことがある。

ここでもう一つ明確にしなければならないのは、一九四〇年代の朝鮮人作家の「日本語文学」に対する今までの研究が一貫して提出している、「抵抗か協力か」、「親日か反日か」という言説は、過去の＜事実＞を記述するためのものではないということである。厳密に言えば、それは解放以後に繰り返し生産されてきた、現在の＜二項対立の認識＞による解釈である。しかし、既存の研究の＜二項対立の認識＞を批判する論考までもが「親日」と「反日」を過去の＜事実＞と見做している。

たとえば、川村湊は「金史良と張赫宙」（『近代日本と植民地 6—抵抗と屈従』岩波書店、一九九三年）という論文で、「抵抗」から「屈従」までの間には、彼らの精神の大きな振幅があり、それは白から黒までの膨大な灰色の領域を含むものである」（二〇六頁）と述べており、尹大石は「抵抗と協力を横断する＜書くこと＞」（『植民地國民文學論』、二〇〇六年）で、一九四〇年代文学における抵抗と協力の共存とその両価性を指摘している。ここで見逃してはならないのは、これらの論考での＜二項対立の認識＞に対する批判が「抵抗」と「屈従」の実態化の前提で行われているという点である。いいかえれば、二人の論者は、既存の研究が過去の＜事実＞を＜誤認＞しているということをまず指摘しながら、その論理的矛盾を批判しているのである。しかし、「抵抗か協力か」、「親日か反

日か」とは、先ほども述べたように、過去の＜事実＞に対する認識（あるいは誤認）などではなく、現在のイデオロギーに基づく言説にすぎない。この場合、過去の＜事実＞がどのようなものであったかは、純然たる解釈の問題である。重要なのは、「抵抗か協力か」、「親日か反日か」という言説がいつどのような状況で生産され、どのように展開されてきたのかという問いである。ここで断言できるのは、今までの植民地朝鮮の「國民文學」に対する研究は、過去の文化現象を親日か反日か、抵抗か協力かというカテゴリーに実態化する、あるいはその両極端の間のどこかの地点に位置づけることによって、その克服を試みたく二項対立の認識＞に再び陥ってしまったということである。

それでは、＜二項対立の認識＞はどのような認識論的、倫理的な欠点を呈するのだろうか、そのイデオロギー的特徴を抽象的な論理で把握することはそれほど難しくはない。

第一、自民族共同体の精神文化を実体として構築することを最優先する点において、それは、他者不在の自己中心主義であり、第二、現在、または新しい国民文化の構築イデオロギーによって過去の植民地期を断絶し、排除している点において、非反省的な現在中心主義であり、第三、ポスト・ナショナリズム、マルティ・カルチュラリズム、グローバリズムなどの、同時代の思想的、知的流れに逆行している点において、反時代的、非連帯的な孤立主義であり、第四、親日か反日かを規定し、前者を断罪するすべての権限を今・ここ・私（われわれ）に与えている点において、反倫理的な歴史修正主義であり、そして第五、植民地支配・被支配を制度的に、日常的に、また心理的に経験する中で民族主体の欲望が形成されていたにもかかわらず、民族共同体の先験的自立を想定している点において、自己欺瞞、自己否認、あるいは自己忘却でもあるということになる。

しかし、植民地期の文学・文化テキストを抵抗と協用に二分化しようとする単純な発想が情緒的イデオロギーにすぎないという事実を素直に受け入れることは実は簡単ではない。たとえば、＜植民地住民はある時は協用しながら、またある時は抵抗する＞、あるいは＜植民地住民の行為の大部分は、抵抗と協用とは関係のない、私的日常生活の範疇に属する＞などのような、抵抗と協用の二項対立の克服を装う主張の中に内在する＜二項対立の認識＞を指摘することは至難である。その理由としてなにより重要なのは、＜二項対立の認識＞の影響が及ばない外部とは現実の場所としては存在しないということだ。植民地朝鮮住民だけでなくすべての被抑圧者（あるいはすべての人間）の行動は、抵抗でもあり、協用でもある。その点において、抵抗と協用とは分節できる概念ではない。しかし一度抵抗か協用かという範疇化が試みられると、ありとあらゆる文化現象がその＜二項対立の認識＞の内部に収められてしまうのである。

したがって、植民地朝鮮の「國民文學」の研究における＜二項対立の認識＞に対する批判は、個別的で具体的なテキストの読みを通して、実践的に行わなければならない。原理的に、＜二項対立の認識＞に対する克服の契機を、抽象的命題として提出することはできないからである。もし＜二項対立の認識＞の枠組みを解体する、新しい、またより確実な方法が定められるとするならば、それもまた、全体主義的イデオロギー言説に還元されて

しまうことはいうまでもない。したがって研究者があたかも外部の命題を会得、実践したかのように、そしてその観点によるテキストの読みと解釈がオリジナルな試みであるかのように考えるのは実は錯覚にすぎない。外部の立場を想定することは、直ちに＜二項対立の認識＞の内部を容認することにつながるからである。＜二項対立の認識＞の外がないからこそ、それへの抵抗も完結することはないということだ。具体的テキストを再解釈するたびに、＜二項対立の認識＞の内部でそれが現在のイデオロギーの事後的な産物であることを暴き出すことによって、それに抗していくしかない。

最後に、＜二項対立の認識＞を克服しようとするテキスト再解釈における共通の条件だけを指摘しておきたい。第一、大きな物語（言説）ではなく、テキストの中の具体的、個別的な発話の意味を回復させなければならない、第二、今までの研究で否定されていた観点、あるいは排除されていた解釈がより妥当であることを示すことによって既存の＜実態化＞を転覆しなければならない、そして第三、こうした完結されえない、終わりのなき回復と転覆の作業を続けなければならない。すなわち、＜二項対立の認識＞に抗する読みとは、基本的にテキスト論的な、ディコンストラクション論的な、同時に、未完成の過程論的な方向に進められるということである。

註

- 1 植民地朝鮮の「國民文學」とは、日本文学史の観点からすると、一九四〇年代の朝鮮を「外地」として統合していた日本帝国主義が、アジア太平洋全域に広まった戦争を遂行するために、その「外地」の人々を非国民として差別しながらも国民の内部に統合していく状況の中で、朝鮮で生産されていた「國語」による文学作品群と範疇化される。もちろん、それらの文学を、植民地朝鮮住民の「國民」化を思想的に、文化的に主導していた雑誌『國民文學』（一九四一年一月～四五年五月）に発表された作品としてより具体的に規定してみることもできる。
- 2 朝鮮語が母語である朝鮮人作家たちが「強要される日本語」で創作するということはいったいどのような事態であったのか。植民地末期の文化統治によって朝鮮人作家に「國語」創作が強要されたという文学史的な定説が非常に皮相的な理解であることはいうまでもない。それを正當に把握するためには、「強要される日本語」に対する朝鮮人作家たちの強烈な同化の意志を同時に考慮しなければならない。朝鮮人作家の「國語」への同化の問題は拙著『コロニアリズムの超克』（草風館、二〇〇七年）の「植民地「國語」作家の内面」などで論じたことがある。
- 3 こうした性急な解釈には作家の行動——周知のように、金史良は一九四五年の終戦直前に朝鮮義勇軍の抗日闘争地区であった延安に脱出した——と作品の意味を符合させようとする意図がつよく働いているとみられる。
- 4 李光洙のこうした要求に答える立場にあった小林秀雄は、はたして＜日本人全体の「内鮮一體」修行への同参＞に対してどのような認識を持っていたのだろうか。この問題は、戦争イデオロギーと思想との関連を掘り起こす手掛かりになると思われるが、それを具体的に示すテキストはまだ確認されていない。「あなたにお願い」というかたちで、『文學界』の紙面に公式的に出された、朝鮮人知識人からの要求に、そのメディアを管轄していた小林秀雄は応答しようとはしなかったということである。
- 5 金ジョン「抵抗から協力への旅程、その間の亀裂」『韓国現代文学研究』26 輯（韓国現代文学会、二〇〇八年一二月、三九六頁）